

会長の挨拶 42 一職種一会員制の本質 ―その9―

ロータリアンをエリートなりと呼ぶことは、正しい意味において、つまり高度の義務意識の立場からそのように呼ぶことは一応さしつかえがないとしても、ただ、もう一点ふまえてなければならないことがある。それは、この言葉を聞いた側がどういう形で理解するかという立場である。もし相手がエリートと聞いて特権階級という考え方で理解する可能性があるとするれば、この言葉はできるだけ避けた方が良いと思われるのである。

その上、ロータリーは人類平等の理念を柱とする思想である。ロータリーの庶民化等という言葉の正当性が主張されている。この言葉はロータリーの格を下げるべきことを主張するというよりは、ロータリアンと一般社会の人々との間に格付けの差異を設けてはならない、という主張なのである。ロータリアンが神なら、それ以外の人たちも神、また、ロータリアンが庶民なら、それ以外の人たちも庶民であるべきだという主張なのである。エリート論がこの立場と、理論上の対立というよりは感情的対立、有用な議論というよりは無用の議論を呼ぶことを心から恐れるものである。(直木太郎『ロータリアン読本』 p.6; 小堀憲助『ロータリー・クラブ』 pp.6-7; 小堀憲助『ロータリーの初心をたずねて』 pp.44 以下参照)

(小堀憲助著『ロータリー思想の理論構造』より引用)